

日本人のキリスト教理解における「実験」概念の研究

— 本多庸一と内村鑑三の「実験」概念の差異 —

A Study on the Christian Notion of “Praxis” in Japan:

A Difference of “Praxis” between Yoichi Honda and Kanzo Uchimura

さ さ き りゅう た
佐々木 竜 太

1. はじめに

内村鑑三（1861-1930）が、『基督信徒の慰』や『求安録』、“How I Became a Christian”（『余は如何にして基督信徒となりし乎』）などを著し、月刊誌『聖書之研究』を創刊、無教会主義を唱道したキリスト者であり、また足尾鋇毒事件反対運動や、日露戦争において非戦論を展開した社会思想家であることは周知のとおりであろう。

内村の活動を、筆者がこれまで研究対象として扱ってきた、内村と同時代のキリスト者である本多庸一（1848-1912）の活動と比較してみると、両者のキリスト者としての生き方は対照的なものであるといえる。キリスト教の伝道において、内村は『聖書之研究』等著述活動に主眼をおいていたのに対し、本多は東奥義塾や青山学院という教育現場にその活動の中心を据え、主に説教によってキリストの教えを説いた。また、内村は自ら無教会主義を提唱し、教会によらないキリスト教のあり方を目指して伝道したのに対し、本多はメソジスト派に属し、青山学院の院長を退任後は日本メソジスト教会の初代監督を務め、日本各地の伝道に邁進した。そして日露戦争時には、内村は非戦論者であったのに対し、本多はキリスト教界を代表し、率先して義戦活動を展開したのである。

このような両者の対照的な活動のあり方に対し、武田清子は「キリスト教受容」という観点から、本多と内村の対照性を明確化した。武田は『土着と背教』において、日本におけるキリスト教受容の方法を五つに類型化したが、その中で本多は、「征露論などを積極的に唱えた」⁽¹⁾キリスト者として、「埋没型（妥協の埋没）」の代表的人物に挙げられている。「埋没型」について武田は、「キリスト教の本質そのものをあきらめさせ、あるいは、喪失してしまうまでに日本化してゆく在り方である」⁽²⁾と定義づけ、「外来宗教としてのプロテスタンティズムの日本への土着の仕方としては挫折といわねばならない。」⁽³⁾と、本多を「キリスト教受容」の「挫折」者として位置づけた。一方で、内村の受容のあり方を、「対決型として見られる要素もあるのであるが、接木型の要素もあり、両要素の結合において彼独自の預言者的キリスト教の特色をなしていた」⁽⁴⁾と分析し、その「対決型」と「接木型（対決を底にひそめつつ融合的に定着）」は、「福音の真理を日本の精神的風土に健全に根づかせようとする試み」⁽⁵⁾であると、内村の「キリスト教受容」の仕方を評価した。

このようにキリスト教伝道のあり方や、キリスト教受容の方法において、対照的な両者であるが、彼らの論考や説教を紐解くと、そこに現出するキリスト教理解に、ひとつの共通性が見られるのであ

る。まず、本多が「基督の心を知る」ということについて語った説教をみてみたい。

「基督の心を知るは神学ではない。聖書を百千遍読んでも無益である。祈祷も大切であるが、祈祷することでもない。基督と共に働くこと、十字架を負ひ自己を棄てることである。父の御心に従ひて克己献身する間に、何時の間にか父の御心が解つて来る。宗教は実験である、基督の心も実際に知らねばならぬ。」⁽⁶⁾（「献身」明治42年10月）

本多は、「基督の心を知る」、つまりキリスト教を信仰することにおいて、「神学」や「祈祷」ではなく、「基督と共に働くこと」という「実験」を重要視した。この「実験」概念は、本多のキリスト教信仰の根本にある概念である⁽⁷⁾。次に、内村が自ら定義するところのキリスト教信仰について述べた文章を挙げる。

「信仰は感情に非ず、学識に非ず、実験である、神と相識るの実験である、故に彼に倣ふて愛し、彼の為に戦ひ、彼と共に苦みて獲らるゝ者である、信仰の善き戦闘を経て得し信仰に由りて我等は救はるゝのである」⁽⁸⁾（「信仰と行為」大正6年12月10日）

このように内村もまた、キリスト教の信仰を「感情」や「学識」ではなく、「神と相識るの実験」とありとし、本多と同様「実験」という語によってキリスト教を捉えていることが看取される。

多くの面では対照的な本多と内村が、キリスト教理解の根本である「信仰」という問題に限っていえば、両者とも「実験」という概念を重要視している事実は、本多の「実験」に着目して研究を続けてきた筆者にとって大変興味深い。では内村は「実験」という概念を具体的にどのように定義し、その定義は、筆者が捉えてきた本多の「実験」概念とどのような差異があるものであろうか。本論文は、明治期を代表するキリスト者である本多庸一と内村鑑三のキリスト教観を比較考察し、彼らが日本人のキリスト教理解、信仰の問題において「実験」という概念をどのように捉えていたのか明らかにすることを目的とする。具体的には、内村のキリスト教観については『聖書之研究』等に掲載された論述（『内村鑑三全集』に所収）を、本多のキリスト教観については『本多庸一先生遺稿』に所収されている説教を資料として扱い、彼らのキリスト教理解を明らかにしていく上で重要ないくつかのキーワードに沿って比較考察をすすめていくこととする。

「教育の現実をこれからの人間の形成や生成という観点から見据え、その意味を編みなおしてゆく」⁽⁹⁾ ことが早急になされなければならない時代状況において、そのための「鍵概念」として「経験」に着目し、「経験」という包括的概念のもつ豊かな可能性を、いま求められる新たな知のあり方との関連において、再び開いていくことによって教育のもつ人間形成の意義を見つめなおす⁽¹⁰⁾ ことを課題に据えた教育学研究に強い関心を抱く筆者は、本論文において、日本教育史研究の立場から「経験」という語を歴史的に捉えることを通して、現代的視座に立った新たな「経験」概念の構築という課題に、一助をなすことができればと考える。

2. 「基督教とは何んぞや」

内村、本多はキリスト教という教えをどのように解釈することによって、「実験」概念を重要視する

に至ったのであろうか。「実験」概念を明らかにするための出発点としてまず、彼らにとって「基督教」とは何だったのか、「キリスト」という人物をどのように捉えていたのかという問題から考察していきたい。

2-1. 内村：「基督教」は「活きたる人」である

内村は、「信仰の単純」（大正3年2月10日）において「基督教は何ぞや」という問いに対し、次のように答えた。

「基督教は何ぞやと問はれん乎、信者は基督教はキリストなり」と答ふるより他に簡短にして明瞭なる言葉はない。基督教の了得はキリストの獲得に在る、基督教はキリストの人格を離れて在る者ではない、基督教はキリストの伝へし教訓ではない、キリスト御自身である、其点に於て基督教は他の宗教と違うのである、仏教は釈迦を離れて在ることが出来やう、儒教は孔子を離れて猶ほ勢力ある教であらふ、然れどもキリストを離れて基督教は無い者である、キリストの歴史的存在を否認して、然り、彼の永久的實在を否定して、基督教は無き者となるのである⁽¹¹⁾（傍点ママ）

「基督教」は「キリスト」である、と簡明に定義した内村は、その理由を仏教、儒教との対比から明確化した。「仏教」は「釈迦」を「離れて」存在することができる教えであり、「儒教」もまた「孔子」を「離れて」も「勢力」のある教えとして存在している。しかし「基督教」は「キリスト」を「離れて」存在し得ないと強調した。その根拠は、「基督教」とは「キリスト」が伝えた「教訓」ではないからである。すなわち「仏教」は「釈迦」の「教訓」、「儒教」は「孔子」の「教訓」であるから、「釈迦」「孔子」を「離れて」も存在し得る教えなのである。内村にとって「基督教」は、「制度ではない、教会ではない、夫れは又信仰箇条ではない、教義ではない、神学ではない、夫れは又書物ではない、聖書ではない、キリストの言辞でもない」。「基督教は人である、活きたる人」⁽¹²⁾（「基督教とは何んである乎」大正3年8月10日）なのであった。

2-2. 本多：「基督教」は「基督」である

では、本多は「基督教は何ぞ」という問いにどのように答えたのであろうか。「基督教三易」（明治24年）と題する説教でその問いに答えている。

「基督教は何ぞと問ふ人あらば、最も全き最も短き答は基督なりと申すことである。いかに六箇しく言はんとしても是よりは出来ず。又易くせんとせば最も之を適當とすることなり。しかし基督教は基督であれば何故に知り易きや。知らぬ人には仏教は釈迦なり、儒道は孔子なりと云ふ様にて、矢張り難きことならずや。否々然らず。此の口調は基督教にのみ用ふべくして仏教や儒道には用い難し。何故と云ふに仏教は釈迦が悟つて説いたもの、儒道は孔子が堯舜に学んで得たる所を述べたるものにて、此の真如彼の忠恕、皆天下古今の共有にて釈迦か孔子の外にある者なり。」⁽¹³⁾

「基督教は基督の言行動作より成立つものにて、(中略) 其の人の生涯が即ち其の道である教であると云ふことだけは、基督に限りたることなり。」⁽¹⁴⁾

「基督教の特質は哲学組織の偉大なるに非らず、教訓の豊富立派なるにあらずして、基督自ら基督教なることなり。」⁽¹⁵⁾

「基督教は何ぞ」と問う人に対して本多は、「基督なり」という答えを完全であり適当なものであるとした。しかし「仏教」や「儒教」には、それぞれ「釈迦」「孔子」といい当てることはできないという。なぜなら「仏教」は「釈迦」が「悟つて説いたもの」、「儒教」は「孔子」が「堯舜に学んで得たる所を述べた」ものであり、「仏教」の「道」、「儒教」の「道」は、それぞれ「釈迦」「孔子」の「外」にあるからである。それに対して「基督教」の「道」は、キリスト自身の生涯にわたる「言行動作」そのものなのであるから、「基督教の特質」は「偉大」な「哲学組織」、「豊富」で「立派」な「教訓」ではなく、「基督」自身が「基督教」であることと定義づけたのである。そしてこのような教えは、「基督に限りたること」であることを強調した。

以上のように内村、本多ともに、「基督教」は「キリスト」であると解釈している事実は注目に値する。他教との比較を通して論証したこの二者の定義を具体化するために、引き続き彼らの論考、説教を読み解いていきたい。

3. 内村、本多のキリスト教理解における「信仰」と「行ない」の関係性

3-1. 内村：「信じて従つて行ふ」

内村は「信仰と行ひ」(明治37年10月20日)において、雅各書(ヤコブの手紙)第二章十四節から二十六節を引用し、キリスト教の「真理」について次のように述べた。

「真理は二元的なり、信仰と善行との合体なり、信仰のみなるもの真理に非ず、善行のみなるもの亦真理に非ず、信仰にして善行なるもの、是れ即ち真理なり、世に信仰のみの宗教あり、亦善行のみの道徳あり、基督教は前者にあらず、亦後者に非ず、基督教は善行の伴はざる信仰を否定し、亦、信仰に基かざる善行を非認す、信仰にして善行なるもの、是れ即ち基督教なり、信仰と善行とを同一物視するものにして、基督教の如き宗教は他にあるなし。」⁽¹⁶⁾

「身(肉体)と靈魂とありて生ける一個の身軀はあるなり、肉体のみにて身体はあらず、亦、靈魂のみにても人身はあらず、二者の合体は一個身軀の存在に必要なり、其如く真理は信仰と行とありて存するなり」⁽¹⁷⁾

キリスト教の「真理」は「信仰」だけではなく、また「善行」だけでもなく「信仰」と「善行」とが「合体」した「二元的」なものであると内村は定義した。それはすなわち、「生ける一個の身軀」が「肉体」と「靈魂」の「合体」として存在するように、キリスト教もまた「信仰」と「行」が「合体」してはじめて「真理」となるのである。こうした論拠に立つ内村は、「基督教」を解釈する「途」について次のように述べた。

「基督教を組織的に解釈せんとして努むる者がある。そして解釈したりとて喜ぶ者がある。然し

乍ら基督教は哲学に非ず科学に非ざるが故に組織的に解する事の出来る者でない。基督教を解したりと思ふ人は未だ解せざる人であつて、其人の解釈は自己をも他人をも満足せしめざる者である。基督教を解するの途は唯一ある。其命ずる所に従つて之を行ふにある。此くしてのみ基督教を知る事が出来る。論よりも証拠である。哲学的に、言語学的に基督教を研究した人で、之を以つて飽足りて他に何物をもも要求せざる祝すべき状態に入つた者の在るを知らない。基督教の研究は研究の不満足を知覚する為に必要である。満足其物は研究に由て得られない。満足は信じて従つて行ふに由て得らる。基督教を解する途は至つて簡短である。」⁽¹⁸⁾（「基督教を解するの途」大正14年4月10日）

「如何にして此くなるを得し乎と云ふに、研究の結果完全に基督教を解したからではない。キリストを信じ彼の命令に服従して彼れ御自身に接したからである。学んで知つたのではない、行つて知らしめられたのである。」⁽¹⁹⁾（同上）

「基督教」は「哲学に非ず科学に非ざる」ために「組織的に」解釈できるものではない。「哲学的」に、「言語学的」に「基督教」を研究しても「満足」は得られない。内村自身も「基督教」を「研究」を通じて「学んで」知つたのではなく、「行つて」知らされたのであつた。つまり「基督教を解するの途」は唯一、「信じて従つて行ふ」ことによって得られるという「簡短」なものであると内村は結論付けた。「信仰の単純」（大正3年2月10日）と題する論考において、「英国聖公会の宣教師の一人」が、「君等日本人が如何に努むるとも到底基督教を解することは出来ない、日本人は基督教を受けてより茲に僅かに五十年を過ぎたばかりである、然るに我等英国人は之を受けてより既に千数百年、随て其研究も自づから深くある 君等日本人は猶ほ当分の間、基督教は之を我等英国人に学ばざるべからず」⁽²⁰⁾と発言したことに対し、内村が、「基督教は学究の事ではない」、「基督教はキリストである」のだから、「基督教を学ぶに オックスフォード 牛津 又は ケンブリッジ 劍橋に学ぶの必要は無いのである」⁽²¹⁾と説いた批判に、上述の内村の解釈が如実に現れているといえる。

3-2. 本多：「祈る者は行ふべし」

本多もまたキリスト教を理解する際に「信仰」と「行ひ」を重要視しており、説教で度々その関係性について語っている。本多における「信仰」と「行ひ」の思想を、彼の説教から紐解いていきたい。

本多は「恭しく敬虔の志をもて神に祈る」という「祈祷」を「宗教心の始めにしてまた其の終」⁽²²⁾りという「宗教本体の要素」⁽²³⁾であるとし、キリスト教「信仰」の中心に位置づけている。しかし本多は、「祈祷」を「捧げ」ただけで「拱手傍観」しては、「未だ祈を待ち給ふ父の御心」を「十分に了解」したものとはいえないとし、次のように述べた。

「祈りなき事業は真正の成功に適する能はざるが如く、実行なき祈祷は無効にして且咎を招く事を考へねばなりません。二つながら相待つて始めて完全の域に達するのであります。」⁽²⁴⁾（「祈る者は行ふべし」明治36年1月18日、施青山学院）

「祈祷」をしなければ、「真正の成功」を得ることができないし、「実行」が伴わない「祈祷」は、「無

効」で「咎」を招くことになる。すなわち本多は、キリスト教理解において、「祈祷」＝「信仰」と「実行」の二者が「相待って始めて完全の域に達する」と言明したのである。

内村、本多の両者ともに、キリスト教理解において「実験」概念を重要視した背景には、上記に見られる通り、キリスト教解釈における本質部分が、「信仰」と「行ない」であったためであると結論付けることができるといえよう。

4. 内村、本多のキリスト教理解の根本：「実験」

4-1. 内村：「信仰」は「実験」である

ここで改めて、本論文の冒頭において内村のキリスト教信仰を表す文章として掲げた、「信仰と行為」（大正6年12月10日）と題する論考をみてみたい。

「人の救はるゝは行為に由らず信仰に由る、然れども信仰は行為に由て強くせらる、信仰を強くする者にして行為の如きはない、信仰は単に福音を聴いただけでは強くない、読書又聖書の研究、必しも信仰を強くするの途でない、信仰を強くする唯一の途は信じて之を行ふ事である、救はるゝための信仰である、信仰を強くするための行為である、行為は救済に直接の関係はない、然れども間接の関係がある、而して行為を救済の近因と見ずして遠因と見て一方に於ては行為を誇るの危険より、他方に於ては行為を怠るの危険より免がるゝ事が出来る、信仰は感情に非ず、学識に非ず、実験である、神と相識るの実験である、故に彼に倣ふて愛し、彼の為に戦ひ、彼と共に苦みて獲らるゝ者である、信仰の善き戦闘を経て得し信仰に由りて我等は救はるゝのである、人は信仰に由りて救はれ、信仰は行為に由りて支えられ且つ強くせらる、行為なくして信仰は終に滅て了ふのである（雅各書二章十八節）。」⁽²⁵⁾

我々は「信仰」によって「救」われ、その「信仰」を「強く」する「唯一の途」は「信じて之を行ふ事」である。筆者がこれまでの考察において内村の思想の特徴として位置づけた、「信仰」と「行為」を基底に据えたキリスト教理解を踏まえたうえで、内村は「信仰は感情に非ず、学識に非ず、実験である、神と相識るの実験である」と強調したのである。内村がこのように「実験」という語でキリスト教信仰を言い表した理由を、「基督教とは何ぞや」（明治38年1月20日）と題した講演から説明してみたい。内村は、「基督教は理屈ではない、是れは哲学を研究して解かる事ではない」と前置きした上で次のように述べた。

「然らば基督教は何のである乎。基督教は第一に事実である、事実である故に実験である、それ我々が聞き、また目に見、懇切に観、我が手捫りし所のもの、即ち元始より在りし生命の道を爾曹に伝ふ（約翰第壹書一章一節）、是れが基督教であつて、其伝道である、基督教の聖書とは教義の論述ではなくして、在つた事の実録である、基督教の伝道とは議論を以てする説伏ではなくして、事実の証明である、基督教は巧なる奇談ではない、（彼得後書一章十六節）、妄りなる談と老いたる婦の怪しき談ではない（提摩太前書四章七節）、去りとて亦智識と偽はり称ふる弁論（全六

章二十節）でもない、基督教は大いなる事実である、是れは奔りながらも之を読むことの出来る事実である（哈巴谷書二章二節）、然かも是れ世界の一局部に隠れたる事実ではない、是れは人類の歴史の上に最も明白にえりつけられたる事実である、基督教は世界歴史の中心である、過去に於て在った事で、現今、尚ほ在ることである、基督教は天然物と同じやうに之を観察し、又実験するにあらざれば解らない者である」⁽²⁶⁾（傍点ママ）

「基督教」の「聖書」は「教義の論述」ではなく「在った事の実録」であるという理解から、内村は「基督教」は「巧なる奇談」ではなく「大いなる事実」であると定義づけたのである。そして、「基督教の伝道」もまた「議論を以てする説伏ではなく」、「事実」を「証明」することなのである。こうした解釈から内村は、「過去に於て在った事で、現今、尚ほ在る」ものである「基督教」は、「実験」しなければ理解できない教えなのであるとする結論に至ったのである。

4-2. 本多：「宗教」は「実験」である

本多はキリスト教理解において、キリストが実際に行なったことを教義とする視座に立っていたことは先述のとおりであるが、より深い信仰心を抱いた「行ない」の必要性を求め、それを「実験」という言葉で表し、日本のキリスト者に訴えた。

「嗚呼真実敬神の念、真実斯道の実行、此の実験的宗教（空想的に關して云ふ）の日本に必要な、何んぞ痛切なるや。」⁽²⁷⁾

「宗教の要は実行にあり、宗教の妙は実験に由りて知るべし。」⁽²⁸⁾

我々「日本人」にとって、最も「痛切」に必要なものこそ、「真実」に「敬神の念」を抱くこと、「真実」に「斯道」を「実行」すること、そして「実験的宗教」、すなわちキリスト教を介して「実験上のことに就て深く考へ」⁽²⁹⁾ていくことなのであると、本多は強調した。宗教に最も大事で必要なものは、「実行」である。そして、宗教の「妙」は、「実験」を通して知ることができると明示した本多は、「基督の心」を「実際に知る」という「妙」は、「実験」でなければ理解し得ないと強調したといえる。

これまで考察してきた両者のキリスト教理解をまとめると次のようにいえよう。内村は、

- ・「基督教」は「キリスト」という「活きたる人」である。
- ・よって、「研究」を通じて「学んで」知ることはできない。
- ・「信じて従つて行ふ」という「信仰」と「行」が「合体」した状態によってのみ理解することができる教えなのである。
- ・したがって「基督教」は「実験」しなければ理解できない。

本多は、

- ・「基督教」は「基督」である。
- ・よって、「基督教の特質」は「偉大」な「哲学組織」、「豊富」で「立派」な「教訓」にあるのではない。

- ・「祈祷」と「実行」が相俟ってはじめて理解できる教えなのである。
- ・したがって「基督教」は「実験」しなければ理解できない。

筆者は「問題の所在」において、本多と内村のキリスト教伝道のあり方、キリスト教受容の方法が対照的であることを明らかにしたが、キリスト教解釈においては、両者は上記のように、全く同じ理解を示しているといっても言い過ぎではない。では、両者は同じキリスト教理解を持ち合わせていながら、なぜその活動が対照的なものとなって表れたのであろうか。筆者は、両者のキリスト教理解の根本に存する「実験」概念にその要因が見出されると考え、以下、本多、内村それぞれにおける「実験」概念について考察していきたい。

5. 本多の解釈における「実験」概念

本多は、様々な問題に直面した際、常にリーダーシップをとって「政治的」に政府や要職者と関わるという実践活動を通して問題解決に努めた人物であった。具体的な「政治的」実践活動としては、「教育と宗教の衝突」事件、「明治三十二年文部省訓令第十二号問題」、「メソジスト三派」の合同、「三教会同」への尽力などが主に挙げられる。本論文においては紙幅の都合上、それらの活動を詳細に検討することはできないが⁽³⁰⁾、「実行」の必要性を説いただけの他のキリスト者では、こうした実践活動は決してできるものではない、「実行」の思想を一步踏み越えた、「実験」思想が本多の根本に存していたからこそ、本多に特有の「政治的行ない」がなされたのだと、筆者は確信する。すなわちこの「実験」という思想が、彼の全ての「実践活動」の基軸だったのであり、本多の独自性を浮かび上がらせる要因なのである。キリスト教伝道において説教を重要視した本多は、決してキリストの教えを人々に訴えただけにとどまらず、「実験」を自ら「実行」した人物なのであった。

6. 内村の解釈における「実験」概念

内村の思想研究において、彼の「実験」概念に言及した研究はいくつか挙げられる。原島正は「事実の信仰（上）－内村鑑三の根底にあるもの－」において、「内村の信仰はどこまでも事実に基づいたものであり、論理ではない」⁽³¹⁾とする観点から、「内村の＜実験＞は事実を事実として知る方法である。」⁽³²⁾と、内村の「実験」概念を定義している。また、中沢治樹は、内村における宗教、信仰というものは「客観的事実に基くものであって、世の論者の考えるような哲理や議論によって承認を求められるところのいわゆる「宗教問題」、つまり教義や信条の問題ではなく、どこまでも「自分の心に驗す実験」の結果証明される真理であった。」⁽³³⁾と論じ、内村の「実験」は「自然科学の実験とは全く性質を異にする道徳的実験もしくは心霊の実験」⁽³⁴⁾であると述べた。しかし原島、中沢は内村の信仰理解の特徴として「実験」概念に着目したにとどまり、「事実を知る方法」としての「道徳的」「心霊的」「実験」を、内村が具体的にどのように捉えていたかという問題にまでは論及していない。以下、内村の論考を読み解き、その問題を考察していきたい。

「基督教には聖書と云ふ書がある、是は神の啓示を載せたものであつて、此書を能く窮めなけれ

ば基督教は解らない、或人は基督教は聖書以外にもあると云ふ、成程或る意味から云へば歴史も基督教であれば科学も基督教であるかも知れない、然しながら基督教がなくても歴史と科学とはあるが、聖書がなくては基督教はない、故に如何に基督教を解釈するかは別問題であるとして、聖書を学ばなくして基督教を知ることは出来ない（中略）基督教は聖書であると云ふたれば余り云ひ過るかも知れない、然れども聖書を離れて基督教は無いと云ふことは出来る、聖書に暗い基督教は薄弱なる基督教であつて、聖書を研めずして基督教を窮めんと欲する者は天を覗かずして天文学を窮めんとすると同じである。」⁽³⁵⁾（「基督教は何んである乎」明治34年7月20日）

内村は、「聖書がなくては基督教はない」、「聖書を離れて基督教は無い」と断言した。内村にとって、「基督教」がどのように「解釈」されようがそれは構わない問題であつたものの、その「基督教」解釈の根本において、かならず「聖書」の「学び」が必要であると訴えた。このように、内村はキリスト教理解において「神の啓示を載せた」「聖書」を「窮め」ることを非常に重要視していたのである。

内村は自らの「聖書研究」を、「社会的大事業の一として聖書研究に従事するのである」⁽³⁶⁾と、「予に取ての必要」であることはもちろんのこと、「国家社会に対しての義務」である⁽³⁷⁾とする視座をも備えていた。しかし、当時の日本のキリスト教界は、「聖書研究の必要を認めて私を奨励して呉れた人は一人もない」、「聖書の研究！世に斯んなツマラない仕事はない。何を為しても斯んな事は為さずとも宜い」⁽³⁸⁾という状況であり、内村が「たまには社会事業をやれとか慈善事業をやれとか催促される」ほど、「皆んな伝道並に教会建設に多忙」であり「聖書研究を閑人の仕事」と見なしていたのであつた⁽³⁹⁾。こうしたキリスト教界の風潮を憂えた内村は、「聖書研究は決して道楽でない、国と社会を作り上げる為に必要である。之れなくして如何して社会事業が興るであらう乎、私には解らない」⁽⁴⁰⁾と言明し、「基督教は言ふまでもない其聖書に於て在る、聖書を研究せずして基督教は解らない。今日の教会の基督教の如くに、聖書研究に重きを置かざる基督教は、弱い効果の挙らざる基督教である。聖書を最も深く学びし国民が社会的にも最も強固なる国民である。」⁽⁴¹⁾と、「聖書研究」の必要性を強調した。

このように、内村がキリスト教理解において「聖書」の「研究」を何よりも重要視していた理由は、これまで論じてきた彼のキリスト教解釈に表れている。すなわち内村は、「基督教」は「キリスト」という「活きたる人」とであると定義したが、逆にいえば、それは「聖書」が「在つた事の実録」であるという理解が根幹にあることからの定義であり、したがって「基督教」は「実験」しなければ理解できないとする結論に至つた。つまり、「実験の書」である「聖書」なくして「実験」はできないのである。その意味で、内村にとっての「実験」は「聖書研究」であつたと筆者は考える。

Michelle LaFayは「内村鑑三と聖書」と題する論文において、内村が「実験の書」として聖書を捉えていることに着目しており、示唆に富む研究である。LaFayは、内村が「しばしば聖書と社会とを比較し、その結果に基づいて社会の問題点を指摘した」⁽⁴²⁾点に「実験」的要素を見出し、内村の著書の中でも特にそれが色濃く反映されている研究として、『貞操美談路得記』を例にとり分析している。また、内村のテキストにおける聖書の引用において、「彼の引用の仕方がどのような広がりをもっている

かを概観」すると、「実際の出来事、または彼が体験したこと」を「聖書の引用と結びつけるような形で、自らの意見を述べ」ていることを指摘し、その意見が「しばしば時局に対する警告」であったとした。こうした考察を踏まえLaFayは、「実験」についてこう述べる。「宗教の「実験」には、最初から信仰というものが入ってくる。信仰は仮説を証明したり反証したりした結果確立されるものではなく、むしろ人間がそれに基づいて自らの価値観や感情を現実と照らし合わせることを通して次第に現れてくるものである（中略）内村は自らの教会をもたなかったため、既存の教会制度に具体化された共同体を現実との接点にするわけにはいかなかった。したがって彼は、自分をとりまく社会や教会の諸問題を信仰に照らして考える「実験の場」を聖書それ自体に求めざるを得なかった」⁽⁴³⁾と指摘した。

内村にとって「実験」とは「聖書に記された物語や歴史」＝「在った事の実録」を通して、「イエス・キリストとの独特な人格的關係」を作り上げつつ確認していく過程であったのである。

7. おわりに

内村は、本多の追悼集会において「私は本多君の友人であつたと曰ふことは出来ません、又無教会主義者なる私が日本美以教会の監督なる君と事業を共に為ざりしは言ふまでもありません」⁽⁴⁴⁾と弔辭の冒頭で述べた。（「日本の基督教界に於ける故本多庸一君の位置」明治45年5月10日）「問題の所在」で触れた内村と本多の対照性を見れば、内村の言葉も至極当然のことであるといえる。内村は続けた。

「然し私も又君と同時代に此同じ日本国に生れ来りて同じ救主イエスキリストを信じたる者の一人であります、且つ常々君に対し厚き尊敬を懷いて居りました故に、今夕茲に聊か君に対し私の哀悼の意を表する次第であります。」⁽⁴⁵⁾と述べ、本多の「特性」を「平和」「やわらぎ」であるとし、本多は「日本国の平和の使徒」であったと評価した。内村は、本多のキリスト教活動や伝道のあり方には批判的であったと推測されるが、本多に対して「同じ救主イエスキリストを信じたる者」として「厚き尊敬」を抱いた理由は、「基督教」は「キリスト」である、したがって「実験」によって理解しなければならないという自らと同じ思想を根幹にもっていたことを認めたためであり、また内村の「厚き尊敬」は、本多がキリスト者として目標とした「平和の使徒」という表現にもあらわれているといえよう。

これまで本多のキリスト教観を「実験」概念に着目し研究してきた筆者は、本論文において内村のキリスト教観を分析考察し、彼の「実験」概念を明らかにすることを通して、明治期のキリスト者が定義するところの「実験」概念をより深く捉えることができた。今後は、本多・内村両者の「実験」概念を、彼らの具体的な実践活動の比較考察を通してより相対化すること、また他のキリスト者が定義する「実験」概念を考察することを課題として取り組み、日本人のキリスト教理解において重要な「実験」概念を精緻化していきたいと考える。

— 註 —

(1) 武田清子『土着と背教』（1967年・新教出版社）p. 7

(2) 同上 p. 8

- (3) 同上 p. 9
- (4) 同上 p. 12
- (5) 同上 p. 9
- (6) 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p. 44
- (7) 本多の「実験」概念については、拙稿「本多庸一における＜政治＞＜宗教＞＜教育＞の構造的連関に関する研究」（青山学院大学大学院2001年度修士論文）、拙稿「本多庸一の「基督主義」教育観における「実験」概念」（青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第47号）において論じた。
- (8) 『内村鑑三全集23』（1982年・岩波書店）p. 416
- (9) 市村尚久他編『経験の意味世界をひらく－教育にとって経験とは何か－』（2003年・東信堂）p. i
- (10) 同上 p. i
- (11) 『内村鑑三全集20』（1982年・岩波書店）pp. 262-263
- (12) 『内村鑑三全集21』（1982年・岩波書店）p. 36
- (13) 青山学院編 前掲書pp. 9-10
- (14) 同上 p. 10
- (15) 同上 p. 46
- (16) 『内村鑑三全集12』（1981年・岩波書店）p. 438
- (17) 同上 p. 443
- (18) 『内村鑑三全集29』（1983年・岩波書店）p. 83
- (19) 同上 p. 84
- (20) 『内村鑑三全集20』（1982年・岩波書店）pp. 266-267
- (21) 同上 p. 267
- (22) 青山学院編『本多庸一先生遺稿』（大正7年・日本基督教興文協会）p. 14
- (23) 同上 p. 128
- (24) 同上 p. 24
- (25) 『内村鑑三全集23』（1982年・岩波書店）p. 416
- (26) 『内村鑑三全集13』（1981年・岩波書店）pp. 13-14
- (27) 同上 p. 410
- (28) 同上 p. 386
- (29) 同上 pp. 241-242
- (30) 拙稿「本多庸一における＜政治＞＜宗教＞＜教育＞の構造的連関に関する研究」（青山学院大学大学院2001年度修士論文）において、「教育と宗教の衝突」事件、「明治三十二年文部省訓令第十二号問題」を具体的にに取り上げ、考察した。
- (31) 原島正「事実の信仰（上）－内村鑑三の根底にあるもの－」『内村鑑三研究第6号』（昭和51年）p. 38
- (32) 同上 p. 40
- (33) 中沢治樹「「仰瞻」のキリスト論－覚え書－」『内村鑑三研究第7号』（昭和51年）p. 6
- (34) 同上 p. 6
- (35) 『内村鑑三全集9』（1981年・岩波書店）pp. 268-269
- (36) 『内村鑑三全集32』（1983年・岩波書店）p. 214
- (37) 『内村鑑三全集9』（1981年・岩波書店）p. 344
- (38) 『内村鑑三全集29』（1983年・岩波書店）p. 259
- (39) 同上 p. 259
- (40) 『内村鑑三全集32』（1983年・岩波書店）p. 214
- (41) 同上 p. 214
- (42) Michelle LaFay「内村鑑三と聖書」『内村鑑三研究第33号』（1998年）p. 85
- (43) 同上 pp. 88-89
- (44) 『内村鑑三全集19』（1982年・岩波書店）p. 122
- (45) 同上 p. 122